

研究ノート

## E.チメッドツェレンの最後の著書 “Монголын эмэгтэйчүүдийн мэдлэгийн уламжлал дэвшлийн зарим асуудал” (モンゴル女性の知識の伝統と進歩の諸問題) を再考する

今岡 良子

### はじめに

筆者は、E.チメッドツェレンの前掲書を軸にモンゴルの女性史をまとめたいと考えてきた。この夏は、その準備のためにウランバートルに滞在した。まず、その調査について簡単に報告しておきたい。

E.チメッドツェレンは、1924年にドルノド県ダシバルバル郡に生まれ、社会主義の時代に現代モンゴルの女性史をまとめた最初の人で、1998年に亡くなった。代表的な著作は、1973年に出版された“БНМАУ-ын эмэгтэйчүүдийг нийгмийн дарадлаас чөлөөлсөн түүх”（モンゴル人民共和国の女性を社会的抑圧から解放した歴史）である。<sup>1</sup>

『モンゴル人民共和国の女性を社会的抑圧から解放した歴史』の章立て

- 第1章 人民革命とモンゴルの女性たち
- 第2章 モンゴルの女性たちが民主主義の道に（1921-1940年）
- 第3章 モンゴルの女性たちが社会主義の道に（1940-1971年）
- 第4章 モンゴル人民共和国の母性保護の問題
- 第5章 モンゴルの女性たちの平和実現のための闘い
- 第6章 モンゴルの女性たちの組織

この本では、人民革命直前から革命後50年目にあたる1971年までの歴史をまとめている。

1990年の民主化以降、女性について書かれた書物は、市場経済移行後の女性たちが抱えることになった様々なテーマで出版されているが、女性史としてまとめた人は、Ts.ツェツェグジャルガルだけである。“Монголын эмэгтэйчүүд XX зуунд: хувьсал, өөрчлөлт”（モンゴル女性の20世紀：変容と変化）という著書が2009年に発行された。

<sup>1</sup> 筆者はすでに、E.チメッドツェレンの著作について、大阪外国語大学女性研究者ネットワーク編（1997）『大阪外国語大学女性学論集』、大阪外国語大学、P.P.81-95で「モンゴルにおける女性解放の歴史-序論：非資本主義的発展論の下の女性解放 1921年～1940年-」を、「アジア現代女性史」創刊号（2005）で「モンゴル国における女性研究の動向と研究紹介」、同誌9号（2014）で「モンゴルの女性史家 E.チメッドツェレンの履歴と著作リスト」を紹介している。

『モンゴル女性の 20 世紀：変容と変化』の章立て

- 第 1 章 20 世紀初頭のモンゴル女性たち（1900-1921）
- 第 2 章 革命初期のモンゴル女性たち（1921-1939）
- 第 3 章 粛清と女性たち
- 第 4 章 社会主義時代の女性たち（1940-89）
- 第 5 章 20 世紀末の女性たち（1990-2000）
- 第 6 章 21 世紀初頭の女性たち（2000-今日まで）
- 結論

2019 年 9 月、首都ウランバートルに滞在している間、彼女らが手に取った文献資料を古文書館や国立中央図書館に探すこと、E.チメッドツェレンと直接関わりのあった人々を探し、その人となりを聞くこと、Ts.ツェツェグジャルガルに会い、『モンゴル女性の 20 世紀：変容と変化』とその後の研究状況について聞きとることを試みた。

国立古文書館では、モンゴル人民共和国で初めて発行された女性雑誌を読むことができ、どうにか、写真を撮ることができた。（写真 1）



（写真 1）

挿絵の中のモンゴル文字は、左の行から  
Эмэгтэйчүүдийн санал хэмээх сэтгүүлийн  
дугаар 2

「女性の考え」という雑誌 第 2 号

Хувьсгалт намын төв хорооны  
эмэгтэйчүүдийн хэлтэсээс хэвлэн  
гаргамай.

革命党中央委員会女性部発行  
と書かれている。

E.チメッドツェレンの著作は、著書だけで 7 冊あるが、国立中央図書館に所蔵されているのは、“БНМАУ-Д ЭМЭГТЭЙЧҮҮДИЙГ НИЙГМИЙН ДАРЛАЛААС ЧӨЛӨӨЛСӨН ТҮҮХЭН ТУРШЛАГА”（モンゴル人民共和国における女性を社会的抑圧から解放した歴史的経験）1973 と Монголын эмэгтэйчүүдийн мэдлэгийн уламжлал дэвшлийн зарим асуудал（モンゴル女性の知識の伝統と進歩の諸問題）1983 のわずか 2 冊だけで、彼女の研究の集大成である前掲書は保存されていなかった。

2 冊の中の前者の本は、『モンゴル人民共和国の女性を社会的抑圧から解放した歴史』という本に類似した内容である。それに対して、後者の本は、これこそが彼女が書きたか

ったことではないか、と思われる内容であった。詳しくは、2.で述べることにする。

E.チメッドツェレンの関係者の内、一人息子のボル、後輩の歴史研究者 U.ゴンゴルジャブ、弟子の歴史研究者 D.エンフツェツェグ<sup>2</sup>と会い、その人となりを知ることができた。特に、E.チメッドツェレンが、晩年、弟子たちを連れて、地方を回り、手工芸の重要性を語り、また実践して見せたという思い出を D.エンフツェツェグから聞いた時、『モンゴル女性の知識の伝統と進歩の諸問題』の内容と一致すると思われた。また、一人息子のボルに会った時、母の著作を翻訳し、紹介する許可を得ることができ、また来年には、母の伝記が発行される予定であり、写真などの資料一式を執筆者に提供したこと、自分自身も母の思い出をまとめようと思っていることを聞いた。それらの出版が終われば、資料を提供していただくことになった。

Ts.ツェツェグジャルガルにはモンゴル国立大学で会い、彼女は、著書『モンゴル女性の20世紀：変容と変化』を書いた後、女性たちのライフヒストリーを聞き書きする調査を続けていることがわかった。社会主義の時代を生きた女性と市場経済移行後を生きた女性に分けて、2分冊の分量の本になるだろう。現在は社会学部長をしているため、公務に忙しく、出版は数年後の予定であるということだった。

本論は、最初に、Ts.ツェツェグジャルガルの著書『モンゴル女性の20世紀：変容と変化』の中でE.チメッドツェレンが書いていない内容について、次に、E.チメッドツェレンの書きたかったことはこれではないかと思った『モンゴル女性の知識の伝統と進歩の諸問題』を紹介し、この本の価値を再考したいと思う。

## 1. Ts.ツェツェグジャルガル著『モンゴル女性の20世紀：変容と変化』について

### (1) 著者について

Ts.ツェツェグジャルガルは、1992年にモンゴル国の最北端のフブスグル県ムルン郡の高校を卒業し、1998年にモンゴル国立大学の歴史・考古学部の歴史教育課程を卒業し、1999年に「ジェンダーにおける教育、労働実践の現状」という修士論文を、2009年に「20世紀のモンゴル女性の社会的地位とその変化」という博士論文を執筆し、学位を取得する。2000年以降、モンゴル国立大学に就職、現在社会学部長。ジェンダー研究センターの代表をしている。

### (2) 執筆意図

Ts.ツェツェグジャルガルは、前書きのところに、「20世紀のモンゴルにおいて政治、経済の変化が女性の社会参加、社会的地位にどのような影響を与えてきたかをまとめ、モンゴルの女性たちの100年の歴史を述べることに努力した。」と述べている。そのため時代区分は、目次が示すように政治体制の区分に依拠したシンプルなものになっている。

---

<sup>2</sup> Ж.Урангуа, Д.Энхцэцэг(2000), "Монгол хатад"

### (3) 目次

目次を詳細に見てみよう。

第1章 20世紀初頭のモンゴル女性たち（1900-1921）（P.P.6-14）
1.1 社会的地位、1.2 社会的役割と権利、1.3 結婚と財産相続、1.4 評価、1.5 まとめ
第2章 革命初期のモンゴル女性たち（1921-1939）（P.P.15-31）
2.1 女性の積極性の回復、2.2 女性に対する政策、2.3 教育、2.4 労働、2.5 政治参加、2.6 意識や生活上の変化、2.7 まとめ
第3章 粛清と女性たち（P.P.32-42）
3.1 粛清初期の女性たち、3.2 粛清深刻化期の女性たち、3.3 粛清末期の女性たち
第4章 社会主義時代の女性たち（1940-89）（P.P.43-68）
4.1 女性に対する政策、4.2 教育、4.3 労働、4.4 政治参加、4.5 家族と健康、4.6 まとめ
第5章 20世紀末の女性たち（1990-2000）（P.P.69-94）
5.1 女性に対する政策、5.2 教育、5.3 労働、5.4 政治参加、5.5 家庭での役割と健康、5.6 まとめ
第6章 21世紀初頭の女性たち（2000-今日まで）（P.P.94-131）
6.1 女性に対する政策、6.2 教育、6.3 労働、6.4 政治参加、6.5 家庭での役割と健康、6.6 まとめ
結論

この章立てから E.チメッドツェレンの前掲書になかったテーマをあえてみると、まず、第3章の1930年代の政治的粛清期の女性についてである。E.チメッドツェレンは、人民革命から50年目の1971年を終わりとして、女性史をまとめた。Ts.ツェツェグジャルガルは、第4章では1940年代から1980年代の終わりまでを対象とし、第5章の1990年代、第6章の2000年代から今日(2009年)までの民主化以降の女性についてまとめている。本論では、E.チメッドツェレンが記述しなかった粛清の時代と1971年以降の状況について、Ts.ツェツェグジャルガルの記述の特徴的なところに焦点をあて、考察していきたい。

### (4) 第3章 粛清と女性たちについて

Ts.ツェツェグジャルガルは、第3章の冒頭を「20世紀の1980年代まで様々な形態で続けられ、モンゴルの歴史に黒い点を残した粛清は、1922年にボドーを処刑したことに始まり、1930年代には、「エレグデンダグワ・タイジの事件」、「ルフンベの事件」、「ゲンデン、デミドの反革命、日本のスパイグループの事件」によって深刻化した。」と書き始めている。

まず、粛清の時代の背景について、簡単に触れておきたい。

1921年のモンゴルの人民革命について、社会主義の時代、D.スフバートルを革命の父として語られ、多くの宣伝映画が作られた。1990年の民主化後、人民革命について、モンゴル人民党（以下、人民党と略す）を結成した7人をリーダーとして映画化されるようになり、学校の歴史の教科書には20人以上の人物が紹介されるようになった。革命のことは、まだ多くの謎が解決されていない。

その人民党は1920年に2つの秘密革命グループ、領事館の丘派と東フレー派が協力し

て結成したが、革命後、路線をめぐる権力闘争が起こる。チベット仏教と僧侶をどう扱うか、ソ連以外の国々、特に西側諸国とどうかかわりを持つか、という点において人民党内でしばしば論争が起き、コミンテルンやソ連共産党の意向に沿わない方が失脚していく。例えば、結成時の7人のうち1人の首相 D.ボドー（領事館派）は、S.ダンザン（東フレー派）との権力闘争の末に1922年に処刑、その後、エレグデンダグワが、中国から武器をえて革命政府を転覆するという冤罪で処刑、D.スフバータル（東フレー派）は1923年に急死、首相 S.ダンザンは、リンチノ（ブリアート人知識人）との路線対立の末、1924年に処刑された。

Ts. ツェツェグジャルガルは、粛清された革命家の家族のその後を O.ダリーマーの2003年の論文‘Монгол дахь улс төрийн хэлмэгдүүлэлт ба эмэгтэйчүүд’（モンゴルにおける粛清と女性たち）から引用し、紹介している。

人民党の結成メンバーは、1911年の辛亥革命以降、民族の独立を実現するために、ボグドを君主とした近代国家を建設しようとしたが、独立宣言を自治宣言に変えられ、内蒙古を分離して中国の領土とし、外蒙古の自治も撤廃する式典を見せつけられ、辛酸をなめた世代であった。そのため、社会主義思想にもとづく革命というよりも、異民族の支配から民族の独立した状態を保ちたいという意識が高く、ソ連やコミンテルンに対しても軍事的な支援を求める一方、自らの要求以外の介入を拒み、毅然とした外交政策をとろうとした。その結果、処刑されていく。人民党結成時の7人のうち、最も若く、ボドーのロシア語通訳でもあった Kh. チョイバルサンが生き残る。

ソ連の J.スターリンが、国内においてレーニンの「新転換政策」を終わらせ、第一次五ヶ年計画を始め、外国においてはコミンテルンを掌握した1928年、モンゴル人民革命党内のスターリン派を使って、また、大日本帝国の軍事的脅威を背景に、モンゴルの支配を強めていく時代となる。

1933年、ドルノド県人民革命党書記で、ブリアート人のルフンベが、日本のスパイであるという冤罪によって、関係者と見られた317人が逮捕、拷問された。これが大粛清の始まりであった。ロシア革命から逃れたブリアート人、モンゴルの東部、内モンゴルとの国境地帯にまたがるように住んでいたことを理由に「日本のスパイ」という容疑がかけられた。

J.スターリンは、ブハーリンの影響をうけた人民党議長 Ts.ダンバドルジを「右翼日和見主義者」として排斥、処刑するよう左派に仕向け、その結果、首相となった左派 P.ゲンデンが、急激な私有財産制廃止、牧畜業集団化、寺院経営の家畜の徴発などを実行した。それに対し、1932年、僧侶と民衆は各地で大反乱を起し抵抗した。その直前の1931年、満州事変が勃発すると、J.スターリンはモンゴルに直接介入を始め、P.ゲンデン以外の左派は「左翼日和見主義者」として追放し、「新転換政策」を実施させた。P.ゲンデンは路線の異なる「新転換政策」の推進にも力をいれたが、1934年に J.スターリンより指示された僧侶の一掃に反対し、1937年に軍事大臣 G.デミドらもいっしょに処刑された。

表1 関連年表

年	できごと
1911	辛亥革命後、臨時政府樹立 ボクト君主制国家設立
1912	露モ協定、自治宣言に格下げ
1914	キャフタ不平等条約、外蒙古自治、内蒙古を中国領に
1917	ロシア革命
1919	外蒙古自治撤廃
1920	ボクト政権消滅。人民党結成
1921	人民革命。ボグド元首
1924	ボグド死去 モンゴル人民共和国宣言
1936	日満軍、モンゴル国境侵犯 P.ゲンデン首相、スターリンと対立
1939	Kh.チョイバルサン首相就任 モソ相互援助議定書締結後、 ソ連軍駐留 ハルハ河戦争（モソ軍と日満軍）

こうして、革命の主要人物の中で唯一生き残った Kh.チョイバルサンに権力が集まる頃、大日本帝国軍と満洲国軍による国境侵犯の挑発が重なり、Kh.チョイバルサンはソ連と相互援助議定書を交わして対抗する。Ts.ツェツェグジャルガルは、「1932年から1940年に反革命という理由で28,451人が冤罪事件で逮捕された内20,822人、つまり73%が銃殺された。」と述べている。これが最も激しい嵐が吹き荒れた時期の粛清である。

このような30年代の大粛清は、「反革命」「日本のスパイ」というレッテルを貼られた人々、政治家から市民まで幅広く処刑されたため、1980年代まで、モンゴル人の心に恐怖を植え付けることになる。目次の第3章のあとに、何年から何年という期間が書かれていないのは、革命から80年代まで続けられたからである。

この粛清の研究については、1990年の民主化以降に公開されるようになった内務省の資料にもとづき、現代史家のTs.バトバヤルや歴史学研究所所長のJ.ボルドバートルを先頭に毎年少しずつその時代の解明が行われてきたところである。民主化後の政府は、粛清の被害者に対して、名誉を回復するための謝罪と慰霊の行事を続けている。現在、粛清に関する内務省資料は、国立古文書館に移され、手続きを踏めば、閲覧することができるようにはなっている。

E.チメッドツェレンは、粛清の負の側面については一切記述せず、それを書くことを許されない時代であった。しかし、息子のボルによると、「母は冤罪で粛清にあった人の残された家族を積極的に世話をし、雇用の機会が身近にあれば迎え入れる勇気のある人だった」と誇らしげに語ってくれた。

E.チメッドツェレンは、ソ連の援助によるモンゴルの非資本主義的発展により、女性の解放が進んだという人民革命党の立場に立って研究しているため、粛清を革命推進のための正義としてとらえ「反革命分子との闘争」に積極的に参加した女性たち、一般庶民の遊牧民女性がいかに革命に貢献したかというところに光をあてている。彼女たちは、「反革命分子」である封建領主や僧侶と果敢に闘い、時には強い抵抗にあい、拷問を受け殺された最期を記述している。それは、社会主義時代に人民革命党からその功績を称えられ表彰された女性たちからの丹念な聞き取りにもとづいているので、目に浮かぶようにリアルに書かれている。

前述のように Ts.ツェツェグジャルガルは、この第3章の粛清の時代について、J.ボルドバートルの著作(2003)『歴史の傷跡の時代解説』、女性の被害者に関しては、O.ダリーマー(2003)の前掲論文を使って整理している。彼女自身の研究成果は書かれていないが、現在行っているライフヒストリーの調査によって、今後彼女自身がまとめる著作に期待したい。

#### (5) 第4章から6章まで 1971年から今日までの女性について

1970年代以降の女性たちについて特徴的なところを述べていきたい。

##### (5.1) 第4章 社会主義時代の女性たち(1940-1989)の特徴

まず、時代背景について簡単にまとめたい。

ソ連とモンゴルが共同し、日本の帝国主義者を粉砕したハルハ河戦争。その翌年の1940年から1945年にかけて、モンゴルはまだ戦時体制にあった。特に、1942年から43年にかけて、ソ連の援助により、モンゴルに様々な工場、皮革加工工場、製材工場、洗毛工場などが建設されていく。Ts.ツェツェグジャルガルは、「1940年代からモンゴルの経済に重要な工場が建設され、稼働したことによって、労働者階級が生まれ、貧困家庭の女性や使用人であった女性たちが労働力となり、縫製や手工芸部門を担い、女性労働者の割合が毎年増えていった。」<sup>3</sup>と述べている。



この写真は、1931-1933年にかけてソ連の援助によって建設されたモンゴルで最初の工場。

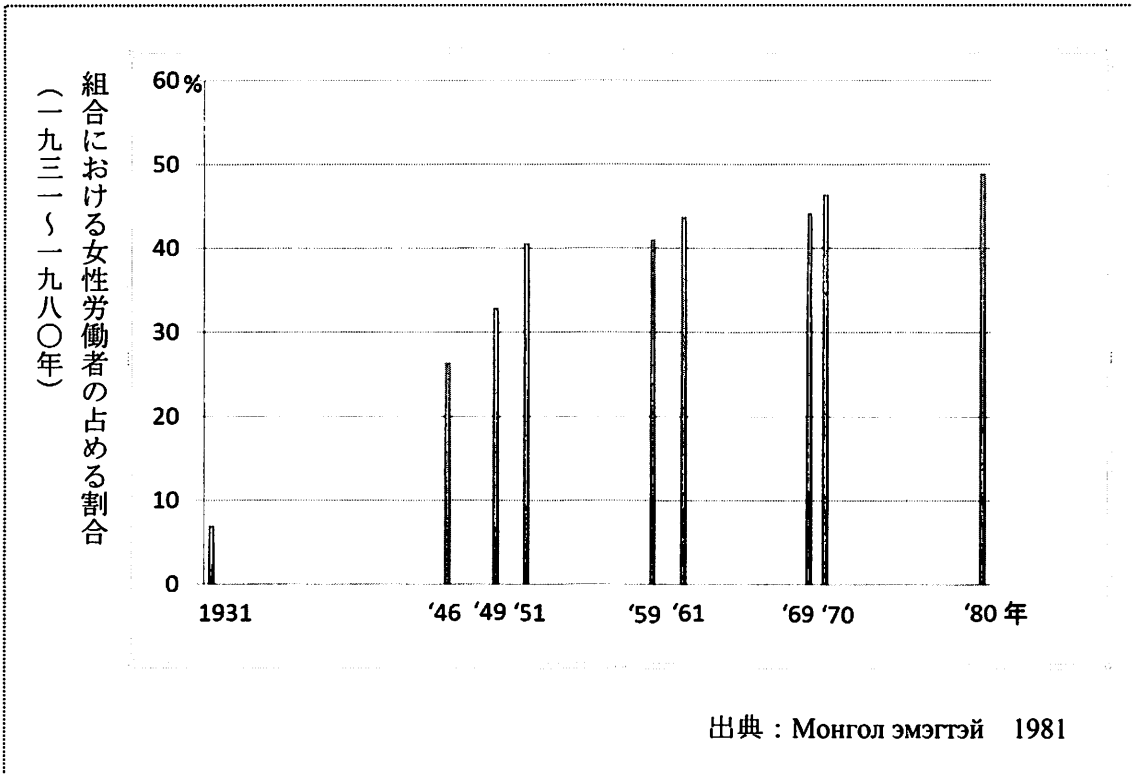
フブスグル県ハトガル市の洗毛工場 引用：<https://www.news.mn/content/print/150174>

E.チメッドツェレンの最後の著書（モンゴル女性の知識の伝統と進歩の諸問題）を再考する

「1940年のすべての女性の人口は376,000人で、このうち、26,976人が公務員になっていたことが、1941年に発行された『新しい道』という新聞に書かれている。女性たちは初め縫製や手動の機械を扱うことが多かったが、機械化が進むごとに、工業のすべての部門で働くようになった。1946年に工業部門の全労働者の26.4%を女性が占めていた。」と述べている。

第二次世界大戦が終わり、本格的な社会主義経済の基盤を建設するため、遊牧民の自主的な集団化を促していく。1959年に、家畜の集団化が完了し、農牧業組合体制ができあがり、計画経済にもとづく社会主義経済が始動する。1961年に国連、1962年にコメコンに加盟する。

Ts.ツェツェグジャルガルによると「1950年代になると、食品工場が増え、農産物の生産量も増加し、生活上必要な製品が作られることで、都市に住み働く女性たちの家事が軽減されていった。」<sup>4</sup>と述べている。そのことが、女性の社会進出を後押しし、「1955年の工業部門の労働者の40%、教師の26%、医師の54%、医療機関の49.2%、芸術部門の34%を女性が占めるようになった。」<sup>5</sup>と述べている。



1960年代、70年代は、ソ連の援助による生産と生活の隅々で近代化が進み、社会主義時代の高揚期と言える。都市の近代化とともに、それを担う人材の専門性が求められ、たとえば、運輸・通信、建設、エネルギーなどの部門に専門的な知識や経験を身につけた女性たちが働くようになる。Ts.ツェツェグジャルガルは、Ch.オユンチメグの研究を紹介しながら、「1960年に女性の公務員の占める割合が30.8%であったが、1982年には48%を

<sup>4</sup> 『モンゴル女性の20世紀：変容と変化』、P.56

<sup>5</sup> 同書、P.56



占めるようになった。1962年には、都市の労働者の51.5%、公務員の66%を女性が占め、このうち、食堂では51.6%、運輸・通信部門の22.7%、建設部門の32.5%、工業部門の47.1%を女性が占めるようになった<sup>6</sup>と紹介している。

1980年代は、経済の基盤である家畜数が増加しないということから、農牧業の集団化の失敗、矛盾が表面化し、計画経済の行き詰まりを批判する声が次第に水面下で大きくなっていく。

1984年、Kh.チョイバルサン死去後、モンゴルの指導者となったY.ツェデンバル首相が健康を理由にモスクワで解任され、J.バトムンフが首相に就任する。1985年、M.S.ゴルバチョフ書記長がペレストロイカとグラスノスチで、国際政治の舞台でも注目され、モンゴルにおいても、それに追随し、刷新を進めていく。

### (5.2) 第5章 20世紀末の女性たち(1990-2000)の特徴

1990年代の時代背景について、簡単に触れておきたい。

1990年に一党独裁が放棄され、多党制による議会制民主主義が実現し、1991年にIMF主導のショック療法により、社会主義経済の基盤となる国営企業、農牧業協同組合が民営化され、公共料金は自由化される。1992年には農牧業協同組合が所有している家畜などの財産の私有化が推進されていく。

国営企業の民営化には、乳児から老人まで、等しく10,000トゥグルクのクーポン券が配られ、その内の7000トゥグルクは、民営化の対象となった企業の株を購入し、3000トゥグルクは、企業内の機械などの現物を購入するよう用途が決められた。しかし、クーポン券を手にしても、市民の多くが株の意味すらわからない状態であり、一部の知識人がよりよい物件を手に入れることになる。また、遊牧民は自分の財産を投資して農牧業協同組合の組合員になったため、国営企業の民営化とは別に、協同組合財産の分配を受けるべきところ、国営企業の民営化のクーポンで、協同組合の財産を購入することになる。その後、生産手段や財産を持てる者と持たざる者に分け、その間に格差を生む始まりが、このショック療法による国営企業の民営化にある。

モンゴルの都市に住む労働者は、体制変換の大きな渦に巻き込まれ、仕事を失うと同時に、社宅を失い、親戚に身を寄せたり、アルコール中毒になったり、子どもがストリートチルドレンになったり、家族の中にストレスが溜まっていく。また、幼稚園や病院などで働く公務員が給与だけでは暮らしていけず、行商などをして離職することによって、一般労働者は社会サービスを受けられなくなっていく。この真っ只中の1996年には、エンフサイハン首相が「わが政権が推進しようとする政策が国民への負担を増加させようとも、これを実施する」とさらに強引に新自由主義路線に舵をきっていく。

---

<sup>6</sup> P.57 Оюунчимэг.1976 "Монгол эмэгтэй",УБ.,Р.30 Ts. ツェツェグジャルガルは、"Монгол эмэгтэйчүүд"と書いているが、原本は、"Монгол эмэгтэй"である。

表2 職種別女性労働者の占める割合（1998年）

職種	%	職種	%
鉱山	30.3	社会サービス	50.3
電気、天然ガス	34.9	商売（市場、小規模）	54.2
通信、輸送	38.5	会計	61.2
加工業	41.2	医療	64.9
軍隊	42.4	教育	66.3
農牧業、狩猟	46.8	ホテル	79.8

出典: Ts.Tsetsejargal(2009),P.79

この10年についてこの章でTs.ツェツェグジャルガルが述べている特徴的なことは、大学進学率は女性の方が高いにもかかわらず、失業者の割合は女性の方が高くなる矛盾についてである。国営企業が急激に民営化されたことによって、経営が行き詰まり、倒産するところが増えて行く。失業後、再就職する時に、女性は不利な扱いを受けることになる。そのことをTs. ツェツェグジャルガルは、統計データを使いながら展開している。

このように女性が高い教育を受けても、その専門性を活かすことが難しくなっている社会的状況の変化を説明した後で、B.Robinsonらの著書「モンゴルにおける移行経済期のジェンダーの諸問題」<sup>7</sup>(1999)を引用し、家庭における女性の地位の低下の表れとしてDVの問題について紹介している。また、驚いたことに、筆者が「アジア現代女性史研究」の創刊号に投稿した論文と2006年に韓国で開かれた第9回国際女性学フォーラムでCAWAが主催したパネルディスカッションで筆者が発表した原稿<sup>8</sup>を引用し、市場経済移行後のモンゴルで組織的な性売買が現れたことを紹介している。

### (5.3) 第6章 21世紀初頭の女性たち（2000-今日まで）

2000年代の時代的背景について簡単に触れておきたい。

モンゴル国では2003年に土地の私有化法が制定された。これは、土地を私有化することなく、共同利用してきたモンゴルの人々にとっては、歴史的なできごとであった。1990年以降、モンゴル政府は国際機関や先進資本主義国から借款をし、融資を受けるための担

<sup>7</sup> Робинсон.Б,Солонго.А,Никсон.Б,1999.Монгол дахь эдийн засгийн шилжилтийн жендэр ийн асуудлууд.Монгол улсын эдийн засаг.УБ[モンゴルにおける移行経済期のジェンダーの諸問題]

<sup>8</sup> Имаока Риоко (2006) Монгол улсад дөнгөж 15 жилийн дотор сексийн наймаа худалдаа бий болсон далд учир шалтгаан, Орчин үеийн Азийн эмэгтэйчүүдийн түүхийн ба жендерийн судалгааны нийгэмлэг,Р.Р.13-20

保として、また、鉱山などを外国の投資により開発する必要性から、土地の私有化を法制化することにした。ただ、家畜を放牧する草原は、憲法により国有地として今も保護されている。但し、鉱山開発などを目的とした経済特区として指定された地域は、その限りではない。

一般の人々にとって、この法律は、一家族あたり 0.07ha の国有地を一度だけ所有し、登録し、占有することを可能にした。国営アパートを私有化することは、1997年頃からすでに始まり、首都のアパートの値段は毎年高くなっていった。土地の私有化法が土地価格の高騰に拍車をかけ、アパートを買う、あるいは借りる時の値段に跳ね返った。不動産という財産を持つ者と持たざる者に分かれていく。

Ts.ツェツェグジャルガルは、この章において、ショック療法で壊れてしまった社会の中で、経済的に立ち直っていく女性と、なかなか立ち直れない女性との格差について、国立統計局等のデータを用いて整理している。

表3 大学等の専門別女子学生の占める割合 (2007-2009年)

学部	%
スポーツ、鉄道、軍隊	41.3
医学	77.4
農牧業	60.5
科学技術、建設	36.1.
自然科学 (生物、物理、化学、数学、PC)	42.1
社会科学 (経済、政治、メディア、法律)	65.1
文学・芸術	71.9

出典: Ts.Tsetsegjargal(2009),P.105

表4 職種別女性労働者の占める割合(2000,2002年)

職種	2000年(%)	2002年(%)
その他	41.7	50.0
社会サービス	28.3	46.9
医療	67.1	66.4
教育	46.6	63.2

E.チメッドツェレンの最後の著書（モンゴル女性の知識の伝統と進歩の諸問題）を再考する

国家公務員・軍隊	41.5	39.2
不動産・企業	66.6	43.3
会計	53.3	55.3
運輸・通信	43.7	45.6
ホテル・飲食	78.8	58.9
商業	82.7	55.9
建設	44.8	46.3
電気エネルギー	44.8	38.9
加工業	49.7	54.7
鉱業	-	28.6
農牧業、狩猟	45.2	46.7

出典: Ts.Tsetsegjargal(2009),P.111

このように5章と6章は、客観的な状況を説明するため、統計データを使って記述している。おそらく、この時代を生きた女性たちのライフストーリーの聞き取りが、今後肉付けして補っていくものと期待できる。

この著書には、E.チメッドツェレンが書けなかった粛清の時代の女性、社会主義末期、民主化後、市場経済以降後の女性についてコンパクトに整理されている。女性が教育を受けて、専門を身につけて、社会に参加していき、自己実現をすることが、困難な状況にあるのか、よりよい状況にあるのか、という視点で女性の解放された状態がわかる。

筆者自身の問題関心としては、遊牧民の家で生まれた女性が、一定の教育を受け、遊牧民として生きる場合、どのように解放されるのか、ということである。モンゴル国の労働力人口はおよそ100万人で、その3分の1を遊牧民が占めている。基幹産業を支える女性が、都市工業社会ではなく、地方に分散、移動する遊牧社会で生きているというモンゴルの特殊性をどう考えるか、ということにある。この著書では、そこまで踏み込んではいないので、これから交流を続け、問題意識を共有し、ともに考えていきたいと思う。しかし、その問題に向き合おうとしたのが、実は、E.チメッドツェレンであることを、今回の調査で再認識したのである。

## 2. E.チメッドツェレン著『モンゴル女性の知識の伝統と進歩の諸問題』について

### (1) この著作について

E.チメッドツェレンの弟子で、モンゴル国立大学で歴史を教えているのは、J.アランゴアとD.エンフツェツェグである。2人は、革命前、封建時代のモンゴルの女性達は抑圧されていたのだろうか？という問題意識から、『モンゴルの王妃たち』という三巻本を2018年に出版している。D.エンフツェツェグによると、前掲のE.チメッドツェレンの『モンゴル人民共和国の女性を社会的抑圧から解放した歴史』という本の題名に使われている言葉の「解放」も、当時のマルクス・レーニンの教義に当てはめて使っていたに過ぎず、王妃から一般の遊牧民女性に至るまで、奴隷的な扱いを受けていたとは考えにくいという。

E.チメッドツェレンの子息であるボルは、当時は、遊牧社会のモンゴルが、フランスを手本にして近代化したロシアと接触し、モンゴル人自身が遅れていると実感したり、ロシア人が遊牧社会から工業化する援助をしたいと思ったり、モンゴルは遅れている、ソ連は先進しているという意識が支配的な時代であった、という。

モンゴルでは、民主化以降、歴史の加筆修正は何度も行われてきた。社会主義の時代、アカデミー会員である歴史家Ш.ナツァグドルジが、牧民による階級闘争が近代への胎動となり、人民革命へと導いたという考えに立って近現代史研究の基礎を築いた。1990年の民主化後は、古文書館の資料が公開され、そこに記録を残すことのできた個人を中心とした歴史研究が盛んに行なわれるようになった。筆者自身は、ある遊牧社会を定点観測地として、フィールドワークを始めて30年になる。この30年の見聞をもとにして考えると、文字資料を残すことのない一般の遊牧民も、様々な日常の活動、時に運動の担い手になり、社会を変化させていることを目撃してきた。歴史の教科書から牧民運動の記述が小さくなり、チンギスハーンやボグドハーンの記述が増えていくことは、残念な気持ちである。マルクス・レーニン主義の歴史観をあてはめることによって、モンゴルの歴史が歪められてきたというよりも、遊牧社会のモンゴルで、その基幹産業の実労働者である遊牧民が歴史の流れを作ってきたことには否定しようがないと考えている。

D.エンフツェツェグによると、E.チメッドツェレンが、遊牧民女性の前で手工芸の重要性を語った、という話を筆者が聞いた時、研究室にあった Монголын эмэгтэйчүүдийн мэдлэгийн уламжлал дэвшлийн зарим асуудал [モンゴル女性の知識の伝統と進歩の諸問題] という本を思い出した。モンゴル滞在中にもう一度読んでみたいと思い、モンゴル国立中央図書館にこの本を探した。

筆者は、E.チメッドツェレンの著作を紹介する時、この本については一言も触れてこなかった。それは、彼女の著作は、長短様々あるが、前掲の『モンゴル人民共和国の女性を社会的抑圧から解放した歴史』にまとめられていて、この本は、遊牧民女性の生活誌であるため、女性史を書く上で、参考にならないと思った。また、当時の筆者には、手工芸を重要なものだという認識がなかったことが大きな要因であると思う。

この著作は、社会主義の末期にさしかかる1983年に出版されている。前述のように、1980年代は、ソ連型の近代化がモンゴルの風土に適応しないと言う論点から、伝統的な生産や文化のあり方を見なおす時期に来ていた。ジャーナリズムは、自然と風土に適さないシステムの導入の結果、放牧地が砂漠化した現場を取材し、集団化のあり方、国家調達、

ネグデルの存在を批判し、伝統的な遊牧の知識や経験を尊重する記事を書く時期であった。

## (2) 執筆意図

前掲の『モンゴル人民共和国の女性を社会的抑圧から解放した歴史』の前書きは、12の文の冒頭が、枕詞のように「V.I. レーニンは」という主語で書き始められている。それに対して、この本には、このような主語は一度も出てこない。

その代りに、前書きの冒頭は、人類史における遊牧文化の貢献を述べている。

人類の長い歴史において蓄積されてきた有形・無形の価値あるものの総体を文化という。この内、有形文化は、物質的な豊かさを直接生み出す生産者や勤労大衆の日常の空間である家庭で生産する知恵や知的文化を増加発展させる要因である。知的文化は、文字によって書かれたもの、教育、科学、芸術、思想、美学、習慣や掟などの多岐にわたるテーマが含まれる。

しかし、ある地域に存在する地形、天候、生業、生活様式は、他と同じものがなく、その違いは、独自の伝統を持ち、固有の文化として形成されてきた。このことが人類の文化を多様で豊かなものにしてきたのである。

たとえば、中央アジアの遊牧民が主に行ってきた生業が牧畜であったため、彼らの文化は、人類の普遍的な文化という面だけでなく、遊牧文化の特殊性を保存しながら、人類の文化の発展に貢献してきたのである。

そのあと、モンゴル人民共和国は、ソ連の援助によって、近代社会を建設することができたことを評価するパラグラフがあり、

人民革命前のモンゴルの女性たちは、精神文化においてはかなり遅れているところがあったが、物質文化においてはそれ以上に学んでいたのだった。

彼女の言葉を言い換えてみたい。遊牧民の家庭において、女性たちは男女平等という思想においては遅れていた。しかし、家畜を飼う労働や畜産物を加工する労働のほとんどすべてを女性は習得していた。夫が家畜という財産を所有していても、妻は畜産物を生活の恵みに変えるほとんどの労働を身につけていた。その経験は、伝統的に受け継がれてきたものであるが、その基礎があるからこそ、科学にもとづいた近代的な生産のあり方を女性たちは受け入れることができ、精神文化を変化させてきたのである。E.チメッドツェレンは、「その基礎」である伝統的な遊牧の技術、畜産物を加工する技術の重要性をあらためて遊牧民女性に教える必要を感じ、この本を書いたと思われる。

## (3) 目次

### 第1章 女性たちの物質文化の伝統と刷新 (P.P.5-50)

#### 1. 家畜飼養に関する知恵

家畜飼養、育成と繁殖

#### 2. 家畜の恵みを利用する伝統的な知恵

食にかかわる知恵

乳製品の加工、ミルクから乳脂を取り出す、発酵させた乳、発酵食品のヨーグルト、馬乳

酒、乾燥させた乳製品、ビヤスラグ、エーズギー、蒸留した乳酒
肉と肉製品の加工
デザート
3. 衣服作りや家庭生活に関わる伝統的な知恵
モンゴルのデール（民族衣装）、靴
4. 住まいに関わる伝統的な知恵
第2章 女性たちの文化芸術の刷新 (P.P.51-100)
1. 女性たちの教育、科学の知恵と刷新
2. 女性たちの芸術文化の伝統と刷新
フェルトで作った美しい敷物など、刺繍、織物
第3章 女性たちの意識に表れた変化 (P.P.101-108)
結論

特徴としては、まず、第1章と第2章が50ページずつ書かれているにもかかわらず、第3章は8ページしかなく、非常にバランスの悪い章立てとなっている。第2章の芸術文化のところ、第1章の4.にまとめておくべき、フェルトの敷物や刺繍や織物などが14ページも使って書かれている。次に、章の表題と中身が必ずしも一致せず、E.チメッドツェレンが遊牧民女性に伝えたいことを中心に書かれている。最後に、伝統的な遊牧の技術にとどまらず、織物について着目している。東部のトワン・ホショーでは、織物工場があったこと、中部のサイン・ノヨン・ハン アイマグで僧侶の衣装の布が織られていたことなど、織物は広く普及しているわけではなかったが、歴史書の中から数少ない事例を引用している。家畜の恵みを利用する技術は、伝統的なものにとどまらず、もっと開発されるべきものとして紹介されているように思われた。

遊牧民は、16、17才になると、もう一通りの技術を覚え、一人前になる。干ばつや雪害などの自然災害に対してどうしたらいいか、親や地域の長老に学ぶが、他に学ぶ機会があるわけではない。E.チメッドツェレンは、遊牧民があまり手にすることがない“Халх товчоо”などの古典的な歴史書を紐解き、遊牧民が興味を持つような書き方をしているが、伝統を内側から改良して発展させていく可能性を示したかったのではないかと筆者には思えた。

#### (4) E.チメッドツェレンの書きたかったこと

筆者は、最初の論文でE.チメッドツェレンの『モンゴルにおける女性解放の歴史』非資本主義的発展論の下の女性解放の限界点として、次のように批判した。

「(前略)モンゴル人民革命党が、革命後わずか20年の間に男女平等を実現した功績は非常に大きい。しかし、「異民族の支配と封建制の残存分子の一扫」や「反コミンテルン派の肅正」など、伝統的な価値や多様な思考をいっせいに消毒駆除した土壤に、社会主義の数々の理念を移植し、「舶来」の化学肥料によって育てた苗は、おのずから成長の限界点を持っていた。」<sup>9</sup>と述べた。つまり、モンゴル人の歴史から生まれた政策が必要だと

<sup>9</sup> 「モンゴルにおける女性解放の歴史-序論：非資本主義的発展論の下の女性解放 1921

批判した。

しかし、この『モンゴル女性の知識の伝統と進歩の諸問題』に書かれていることは、畜産物という物質を生活の豊かさに変える技術の伝統こそ、モンゴル人の歴史であり、それを基盤にした近代化がモンゴルに適しているということである。それは、筆者の考えとまったく一致するものであった。

さらに、筆者は、次のように続けて批判した。

「第二に、前節の④で『労働者階級の創出』とあるが、労働者は遊牧社会から創出された。家事と家畜の世話から「解放」された女性は、労働者の権利を与えられ、社会資本の蓄積する都市に住んだが、家事と家畜の世話を続ける女性は遊牧社会に取り残された。たしかに伝統的な遊牧的牧畜業は「近代的」に改造され、社会主義経済の基盤を支えるよう集団化され、都市住民の食料、軽工業の原料、コメコンへの輸出産品を生産するようになった。しかし、そのように遊牧社会が生み出した富を優先的に分配、集積された都市は「繁栄」し、遊牧社会との間に歴然とした格差が生まれた。社会主義によって克服されるべき都市が農村を搾取する問題は、「社会主義」的に構造化されたのである。

また、自然は多様な生命を有し、絶えず変化し、そこで生きる人間を規制する。遊牧民が自然から多種少量の恵みを得て生活の糧にするには、多様な質の労働力が血縁によって集まる家族という集団、そして家族間の共同体がなくてはならない。家族や共同体から個人を解放する方法は、遊牧民女性には当てはまらない。また、女性や母性を保護する法律や施設は、そこから遠く離れた世界にすむ遊牧民女性の日常を支えるものにはならなかった。都市労働女性と遊牧民女性とでは、解放の方法が違うのである。」と述べた。つまり、遊牧民女性の解放について書いていないと批判したのであるが、この著書は、遊牧民女性に向けて書かれたものと言える。

しかし、20年以上も経て、今、『モンゴル女性の知識の伝統と進歩の諸問題』を読み返してみると、彼女が本当に書きたかったことは、『モンゴル人民共和国の女性を社会的抑圧から解放した歴史』ではなく、こちらだったのではないか、と思えるのであった。

筆者はこの6年、生き物の進化の到達点としての毛や皮、肉、乳の物性に興味を持ってきた。つまり、変わることはない物の性質とは何か。物性が求めた人間の技術がどのようなものか。そして、どのような衣食住を生み出すのか。物性という視点から遊牧民の伝統文化の普遍性を分析してきた。今、畜産物の物性は、電子顕微鏡などの精密機械でその構造を把握するが、本来は、家畜を飼う人々の指のひら、手のひらによって感じ取られてきたものである。筆者は、手工芸の重要性に気づき、自分自身も毛や皮革の加工技術を学び、物性と技術の必然的な結びつきを確かめてきた。そのほとんどの技術は、遊牧民女性たちが身につけてきた技術でもある。

社会主義の時代、家畜の集団化により、家畜の所有者は遊牧民から協同組合に移り、遊牧民の家庭で作られなくなったもの、国家調達に供出し、ウランバートルのコンビナートで機械によって生産されるようになり、作るよりも買って消費されるようになったものもある。しかし、1991年の市場経済への移行により、協同組合が解体され、家畜を遊牧民の手に戻したことで、伝統的な手工芸が復活する一方、石油化学製品が大量に入り込んでき



た。また、首都ウランバートルに移住した元遊牧民のシングルマザーたちは、就職することが難しいが、経済的な自立を目指して、加工して、販売するものは、羊毛や革を加工したものだった。

E.チメッドツェレンは、政治や経済の体制がどのように変化しても、女性の手を受け継がれた技術を大事にし、それを活かすことで、遊牧民女性は自立ではなく、自律して生きていけることをこの本で述べたかったのではないか。そのように推察する筆者は、モンゴルの女性たちの現代史をまとめる上で、この著作が、E.チメッドツェレンの最も書きたかった内容として紹介しておきたいと思った。

E.チメッドツェレンの最後の著書（モンゴル女性の  
知識の伝統と進歩の諸問題）を再考する